

大阪イントネーションの法則

29期生

I テーマ設定の理由 (じっくり読んで下さい)

ピアノに自分の声があるか、探したことがあった。「声」とは日常の話しことばの声(=音)の高さのことだ。12音階の中に、それらは1つもなかった。がっかりしたが、やがて水を入れたコップやギターに、それらを見つけた。さっそく思いつく単語を、まず僕が言ってみて、彼ら?と同じようにまねさせた。(コップよりギターの方が、ずっと上手だった)

そんなことを繰り返すうちに、気づいたんです。次の2つのことを……。

- [1] 単語の音の高さのつながり(イントネーション)には、いくつかのパターンがあるのではないか?
- [2] おたまじゃくしが12の音(オクターブは考えないで)しか表わさないように、話しことばにも、12ぐらいしか音(の高さ)がないのではないか?

例えば、こすもす(秋桜?) 左の6つの単語、口を開けずに、声を出して読んでみて下さい。(モグモグ…とハミングの要領で)
 あひる(アヒル) やってみると、「物理」と「にきび」が同じになりますね。「こすもす」と「阪神」「あひる」と「寝太郎」も同じになると思います。[1]と[2]は、そのことを、かっこよく書いたんですが、果たしてこれには何か規則性があるのか、もしあるのなら、さらに

詳しく、1つのパターンにあてはまる語句に共通性→原因はないだろうか、と疑問をいだき、なかなかおもしろそうだったので、規則性があるという確信と願いをこめて「大阪イントネーションの法則」(規則より法則にした方が本に載るかと思って、)というタイトルをつけて、この研究を始めました。

II 研究方法と内容

。なぜ「大阪イントネーションの…」としたのか。

この研究を行なう上で、最も重要な点です。研究材料が大阪で生まれ育ったばかりの声だから「大阪イント…」としました。一もしほくが東京の人間なら「東京イント…」とつけたでしょう。そもそもこれがこの研究の最大の欠点で、ほくは正しい大阪弁を話しているのか。→正しい大阪弁を話している人がどれだけいるのか。→正しい大阪弁なんて、つまり「大阪イントネーション」なんてあるのか。と疑問に思うのです。同じ大阪に住む人でも、地域、年齢、男女などの違いで、一人一人独自のイントネーションがあるのではないのでしょうか。そう考えた上で、研究の対象は、ほくの声だけにしました。ですから結果に表われた細かい数字が「大阪イントネーションの法則」を知る正確なデータではありません

んし、さほど重要な数値でもありません。その数字は「谷 幸典イントネーション」の法則を知る手がかりであって、さらにそれから存在のはっきりしない「大阪イントネーション」の法則を導こうとしているのですから。

☆くずれゆく計画

まず、ギターと夏休みを使って、国語辞典にある語句全部のイントネーションを調べた。といたいところですが、残念ながら途中で、どこるか調べ始めてすぐにくじけてしまいました。(以下、言いわけではない)だって、一単語の各音の高さを完全にコピーするのに5分は必要。それが辞書には75,000個あるんだから、まず無理。(一日三時間ずつ調べていけば、5年かかる!)それに、正確に正確にコピーしても、果たして、元のイントネーションが正確なものかと思うと、どれだけ価値のあるデータが得られるのか、時間のむだだと悟り、しかしここで研究をやめにするわけにもいかず、調べる数をぐっと減らして「二字」の単語だけにしました。但し、辞書にない、つまり意味のない二字の単語もその対象にしました。

右の<実行のページ>は調査の足跡です。単語、約2,000個をここに記入していくうち、二字のイントネーションにはやはり、前の一字が後よりも高い型(実行のページ中の「イントA」と、2字が同じ高さの型「イントB」と、前の一字が後よりも高い型「イントC」の3つに大きく分けられて、それぞれの型にあてはまる単語は、「物理」と「にきび」のように、個々の音の高さも同じだということがわかり、調査の段階で、2つの疑問(推測)が、確信できるものとなりました。(「実行のページ」をハミングして、確認しよう!)

但し、これは二字の単語に限って言えることで、3字以上にもあてはまるかはわかりません。(今思うと、もう少しがんばれたのに…。また暇を見つけて挑戦します)

＜実行のページ＞		後の一語の母音(んはn)					
イント	意味		相当する語句				
A	ある	a	ああ	あか	あわ	いわ	うた
○		i	あい	あき	あし	あみ	いし
＼		u	あく	あす	いぬ	うふ	えす
○		e	あけ	いえ	いけ	いせ	うね
		o	あこ	あそ	いも	いよ	いぬ
		n	あん	いん	うん	えん	おん
A	ない	a	いあ	いら	うあ	うか	えあ
○		i	あひ	えに	おひ	きに	くひ
＼		u	あふ	うゆ	うぬ	えう	えく
○		e	えせ	えけ	えね	えへ	えめ
		o	うこ	うよ	うの	えこ	えの
		n					
B	ある	a	いか	いや	うわ	えた	えな
○-○		i	あり	いに	いき	うき	うし
		u	あく	いく	いす	いぬ	いむ
		e	あえ	あけ	あて	あね	あれ
		o	あの	いそ	いこ	いの	うお
		n	きん	さん	せん	てん	ひん
B	ない	a	あた	えは	おあ	おた	おは
○-○		i	えひ	そに	てち	てに	にに
		u	あぬ	「イントA」の時も			
		e	いめ	あって、言うたびに			
		o	いお	イントネーションが			
		n		変わりはっきりしない。			
C	ある	a	あか	あさ	あな	あま	あら
○		i	あい	あき	あち	あに	いい
／		u	あう	あつ	あむ	あゆ	ある
○		e	あえ	あお	あめ	いね	いて

III 研究結果 (「法則」ではなく「推則」ですが…)

調査の段階で、その規則性はわかったが、それを裏づけるもの(イントネーションを決定するいわば法則的な事)はないだろうか。それを見つけることを目標に「実行のページ」を整理していきました。(具体的には、同じイントネーションの単語の共通点を調べた。)

[1] 母音の並び方とイントネーションの関連性 (「関連性」って何か上品な響きのする素敵なことばですね。好きです!)

全くの直感だけど、「母音の並び方によって、イントネーションは決まるのだ」と仮定して、<実行のページ>を後の語の母音別に書きこみ、前の語の母音もすぐわかるように、ああ・あい・あう……の順に調べていったので、能率よく、これ以上分析できないところまで細かく整理できた。そして何かイントネーションとの関連性はないか。調査の時と同じぐらい時間をかけて調べた。しかし、決め手になるほどのものは何も見つからなかったんです!(ショックのあまり、研究発表会では、母音とイントの関係を表わした、ただ数字がいっぱい並んだだけの表を、さもオレは難しい研究をやったんだ!と言わんばかりに、登場させましたが、まさかここに書く気はありません。[表3]はそのさわりですが。)

子音についても一応、調べましたが、全然、共通性は見つかりませんでした。「個々の語の並び方によって、イントネーションは決まらない」この研究([1])で、わかったことは、これだけです。

[2] 品詞との関連性は?

他に共通点があると考えられるのは、品詞別ぐらいですけれど「花」と「鼻」「白」と「城」のように、同じ品詞でありながら、イントネーションが違う例がいくつもある。初めから品詞とは無関係だということは明らかではないか。そう思って、あまり期待しませんでした。しかし、なんと!ここに「大阪イントネーション」のルーツが潜んでいたんです。

下の表1に、名詞、動詞(+語尾で2字)の2つだけ、おおよそですが、イントネーション別の個数をとりだしました。

	名詞例	名詞例	名詞例
イント	A-a 92(さか)	B-a 31(とら)	C-a 39(こま)
イント	A-i 103(つき)	B-i 30(かに)	C-i 21(けち)
イント	A-u 74(てつ)	B-u 8(りく)	C-u 21(なす)
イント	A-e 39(ひめ)	B-e 31(まけ)	C-e 22(かめ)
イント	A-o 51(たこ)	B-o 23(へそ)	C-o 26(うそ)
計	359	123	129

	動詞例	動詞例	動詞例
イント	A-a 6(みた)	B-a 0(-)	C-a 0(-)
イント	A-i 0(-)	B-i 42(むき)	C-i 35(のみ)
イント	A-u 0(-)	B-u 59(ける)	C-u 55(うつ)
イント	A-e 33(やれ)	B-e 5(きて)	C-e 44(とれ)
イント	A-o 5(ねろ)	B-o 39(いと)	C-o 30(よも)
計	44	145	164

☆「意味のない単語をどう発音するのか」<実行のページ>以外にもいくつか実験?を重ねていくうち、「何が意味のない単語をそう発音させたか」を知ることが、「法則」を導びくカギになるのだと感じ、<実行のページ>では、意味のない二字も詳しく調べたわけです。(それに気をとられ、濁音・半濁音を無視してしまったのがこの研究の大きな反省点。でもあまり影響のないことが、この後を読めばわかる。)

イントA	788
イントB	53
イントC	17

a'=前の 表2は<実行のページ>の意味のない単語のイントネーション別。表3は、そのうちイントAを、母音があ段音別に見たもの([1]参照)。「表1」と「表2」だけからでも、「法則」は見いだせます。

(共に意味のない二字単語)

A-a	191	a'	124
A-i	120	i'	122
A-u	144	u'	176
A-e	145	e'	204
A-o	188	o'	143

◎大阪イントネーションは、名詞は下り調子に、動詞は、各音同じ高さ、或いは、終わりの一音を上げるのが原則である。

しかし例外が多いのは、「元来、名詞はすべて下り調子だったが、語数が増えるにつれ、ごろのいいようにイントネーションが変わったのもあり、現在

では、他の地方のイントネーションも影響して、原形が保たれなくなった」とぼくは都合よく推則(全く根拠がない)する。果たして「元から名詞のイントネーションはまちまちだった」のか?残念ながらそこまで手がまわらず…。「法則」を裏づけるものがなく、「推則」に留まってしまいました。

IV 結論

結果の終わり(すぐ上)に書いたとおりです。「動詞」について補足しますと、表1でA-e-o, B-i-e-oはすべてB-uが終止形の単語の活用形の一部。C-i-e-oはすべてC-uが終止形の単語の活用形の一部です。「各音同じ高さ、或いは、終わりの一音を上げるのが原則」と書きましたが、それは終止形を基準にしたもので、動詞のイントネーションは、さらに活用形によって区別されます。

V 総括 (本音を聞いてくれ!)

毎年テーマを変えて、今年が三回目、最後の自由研究。失敗してもいいから、自分の力だけで、この研究を進めていこうと決心し、やり通した。参考文献、助言一切なし。文字どおり自由気ままに、おもしろく研究に遊べた。が、終始あせる気持ちがあった。計画があやふやだったので、行きあたりばったりの研究になり、「もう、そこまでやらなくてもいいだろう」となまけ、何日かしてまたやりだしたり、(そんな時、発表会で一言も話せずにあせている自分の姿がちらついたものだ)とかく「ノートのページをかせごう!」と思いがちだった。よく結論までこぎ(じ)つけた。と正直いってほっとしている。

参考文献、助言のない自由研究は、自由ではあるが、まさに孤独だった。自分につらく重荷にさえなった。

「太平洋をあてなく泳ぎ、やっと見えた無人島に向かって、必死に泳ぎ着いた」研究を終えて、そんな満足感があった。